

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

前回から始まった「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術」、今回から釣法毎のウキの解説に入っていく。

その第1回目は、底釣り編である。

底釣りにも、ノーマルの底釣り、追わせる底釣り、段差の底釣り等、様々な釣法があるが、釣法毎のパーツや形状の違い、それによって何が変わるのか、「尽心作」の製作者である北村滋朗氏に解説してもらう。

ウキの使い分け（底釣り編1）

1. はじめに

以下、代表的な釣法毎のウキを解説していく。

ウキ製作者がどのように考えて、素材の選定、長さ、径を決めているのかを解説したい。

ただし、これはあくまで私個人を基準としたウキの製作であって、釣り人が自分のベストのウキを求めて、自作されるのが最も有効な方法ではないかと思う。

釣り人×釣法=∞（無限大）のバリエーションが考えられる。

以降の解説は、あくまでその参考とお考えいただきたい。

その第1回目は、ヘラブナ釣りの基本である「底釣り」用のウキである。

2. 「尽心作」における底釣りウキのバリエーション

「尽心作」における底釣りウキのバリエーションとして、3タイプを用意している。

今回はType-AとType-A2、Type-A3の仕様とコンセプトを比較しながら、釣法が異なればウキのスタイルが変わる、その効果を最大限に活かす使い方を重点に解説したい。

Type-A: ノーマルの底釣り向け



Type-A2: 段差の底釣り向け



Type-A3: 追わせの底釣り向け



各タイプのコンセプト

Type-A :

典型的なウキがなじんで、戻してツンのアタリをとる釣りに使用する。ボディはうわずらないよう、一気に底までなじませるので、2枚合わせでオモリを背負うタイプにしている。なじみ込み途中の余計なサワリをださないために、短い竹足タイプ、ウキの肩もなで肩にして、肩で立ち上がりながらも、トップ付け根まで、「スッ」となじむ形状としている。トップは戻りを重視するため、細のパイプトップにしている。タナを凝縮するために、あまり長いトップは必要ない。

Type-A2 :

段差の底釣りにも2つバリエーションがあり、1つはバラケを持たせる釣り、もうひとつはバラケを抜いた釣りである。

また、段差の底釣りには宙釣りの要素と底釣りの要素を持ち合わせている。

釣り人おのおののアプローチの仕方も、底釣りの変化形と捉える方、メーターウドンセットの延長線上として考えておられる方等、各人様々である。

従って、この釣法に使用されるウキも、チョーチン用をベースにしたものから、底釣りをベースにしたものまで、様々なタイプが市販されている。

「尽心作」の段差の底釣り用ウキは、なじんだら、数秒でバラケを抜き、クワセエサだけで待つ釣りをイメージしたものを用意している。

上記イメージに基づき、短めのPCムクトップとし、脚はやや広いレンジを探りたいことから長めにし、かつ戻り重視ということで、比重の軽い竹製をチョイスしている。

Type-A3 :

底近くで、沈下途中のエサを追わせて食わせるイメージの底釣りウキである。

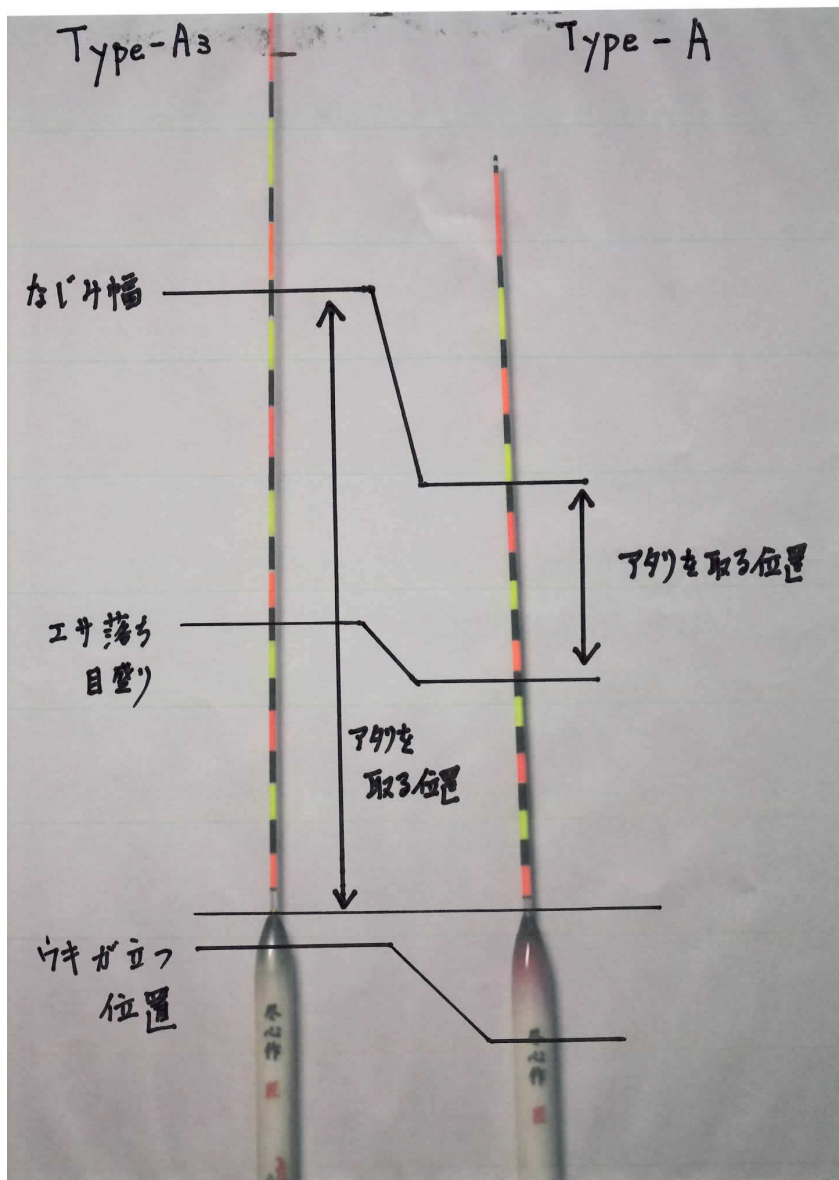
ウキの肩で立ち上がり、トップのストロークを最大限活かす。底近くというイメージから、脚を長くして、オモリが高い位置でウキを立ち上げる必要がないので、カーボン製の短めの脚を採用している。トップのストロークを活かすという意味で、グラスソリッドを採用。グラスソリッドという比重の重い素材をトップに採用していることから、ウキの形状をツチノコ形にして、水の鉛直上向きの圧力抵抗を軽減、ウキの戻りを出やすくしている。

尽心作での底釣り用ウキの仕様比較

	Type-A	Type-A2	Type-A3
ボディ	孔雀の羽根 2 枚合わせ : 6. 0 mm 径	孔雀の羽根 2 枚合わせ : 5. 8 mm 径、食いが渋い時に行う釣りなので、わずかの動きも表現できるように、2 枚合せにして 5. 8 mm 径に孔雀の羽根を修正している。	孔雀の羽根 2 枚合わせ : 6. 3 mm 径、体積が大きいものほど戻り力が強いことから、2 枚合せにして 6. 3 mm 径に孔雀の羽根を修正している。
脚	竹脚 4 0 mm	竹脚 6 0 mm、オモリが比較的高い位置でウキを立たせたいことから、長さを脚長とおなじ 6 0 mm としている。	カーボン脚 3 0 mm
トップ	戻り重視のため、細パイプトップを採用	PC ムクトップ (根元径 1. 0 mm → 先端 0. 6 mm) を採用している。食いが渋い時に行う釣りなので、わずかの動きも表現できるように、ムクトップを採用している。一定バラケを抱えるこ	グラスソリッドムクトップ (PC ムクバージョンもある)

		とが必要なことから、PC ムクを採用している。グラスソリッドムクは、バラケの調整が難しく、上級者向けである。	
ウキが立ち上がる位置	肩がややでたところ	肩がでたところ、	トップ付け根
トップのストローク	短い	短い	長い
形状	なで肩、流線形で、鉛直上向きの水の圧力抵抗は強く、戻りにくい。いわゆる押しえつけられている状態。しかし、逆に鉛直下向きの水の圧力は弱く、なじみ込みはスムーズ	なで肩、流線形、ただし、ウキの肩の形状は、Type-A よりもやや急テーパー、これにより Type-A と比較すると、立ち上がり後、ウケが出やすい	ウキの上部、下部ともテーパーが短く（ツチノコ型）で、鉛直上向きの水の圧力抵抗は弱いことから、ウキが戻りやすい。

Type-A と Type-A3 の比較図



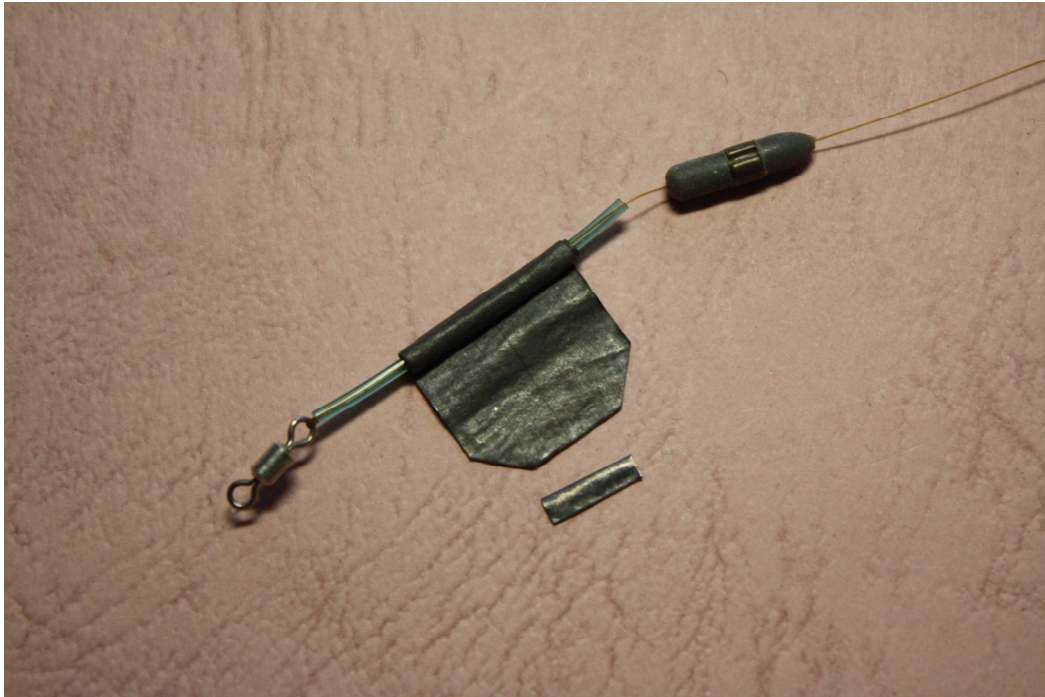
各タイプの使い方

(1) Type-A

エサ落ち目盛の設定は、ハリをつけた状態で、11節の場合は7節、9節の場合は6節出しを基準としている。

なじみ込み途中のアタリは極力取らず、なじんで戻してツンや食い上げアタリを追っていく。

もし、ウキの戻りが悪いと感じれば、オモリをすこしずつカットして、ウキの余浮力を増やしてやる。(モドリ易くしてやる。)



ウキが動き過ぎると感じた場合には、小さく切った板オモリ片を板オモリに巻き込み、ウキの余浮力を減らしてやる。(ウキを動きにくくしてやる。)

(2) Type-A2

エサ落ち目盛の設定は、ハリをつけた状態で、11節の場合は7節、9節の場合は6節出しを基準としている。

なじんだら、数秒でバラケを抜き、クワセエサだけで待つ釣りをイメージしている。もし、底の状態が悪く、クワセだけになった状態でウキの戻りが悪いと感じれば、オモリをすこしずつカットして、ウキの余浮力を増やしてやる。(モドリ易くしてやる。)

(3) Type-A3

エサ落ち目盛の設定は、ハリなしの状態、ウキの肩とトップの接合点を基準としている。従って、ハリをつけたところが、真のエサ落ち目盛となる。

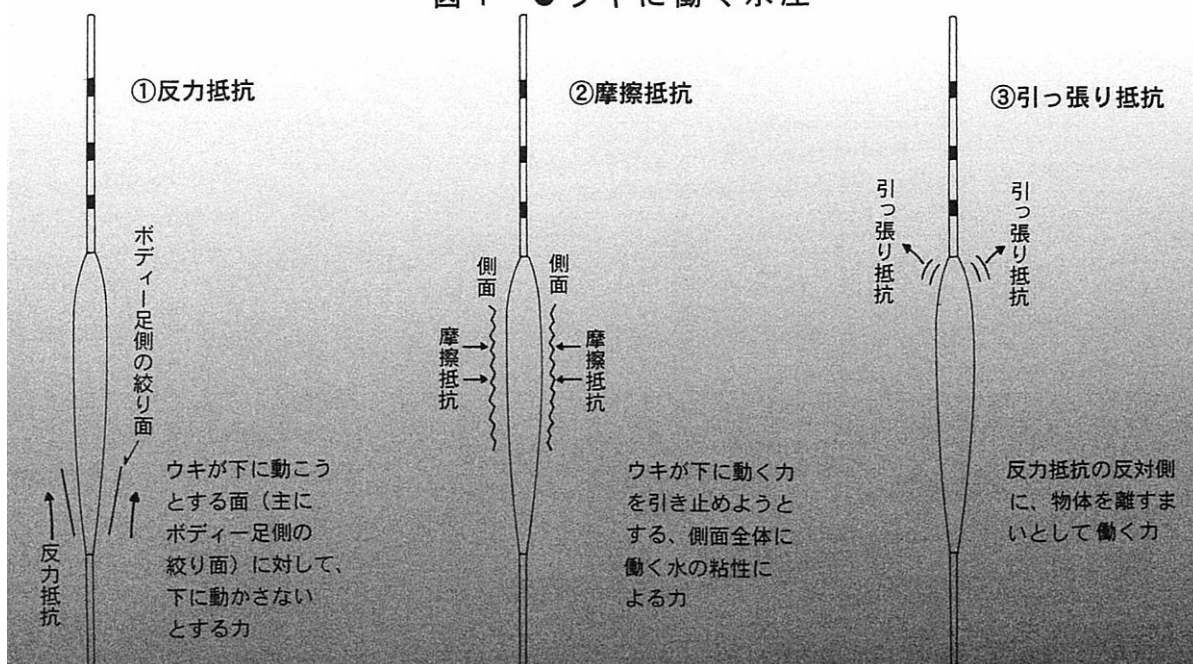
なじみ込み途中から、なじんで戻してツンや食い上げアタリ等、いろいろなアタリに手をだして、その日のヒットパターンを見つける。

余り大きなハリを使うと、ウキの戻りが悪くなるので、エサの比重とハリ大きさ、重さの選択が、この釣法のキモとなる。

ヘラウキに働く水圧について

ヘラウキがあるショックによって動こうとすると、ヘラウキに対して働いている水圧が、以下の3つの異なった抵抗に変化して、ヘラウキに作用する。(図1参照)

図1 ● ウキに働く水圧



出典：「へら専科」2010年11月号「もっとウキを知りたい」より

- ①反力抵抗＝ヘラウキが下動しようとする面（主にボディ足側の絞り面）対して、下動させまいとして働く反力抵抗
 - ②摩擦抵抗＝ヘラウキの下動を引きとめようとして、側面全体に働く水の粘性による摩擦抵抗
 - ③引張抵抗＝反力抵抗の反対側に物体を離すまいとして働く引張抵抗
- 引張抵抗は、船が進むとき、船の後ろに生じる渦などがそれで、形状によっては、かなりのブレーキになる。ヘラウキでは、一昔前にカツケ釣りでも用されたトンカチウキ（頭側の絞りが無いヘラウキ）がこれにあたる。

底釣りにおけるウキの形状について

底釣りにおけるウキの代表的形状は、以下の2つである。

- ① 流線型（なで肩タイプ）：重心が下にくるため、ウキの立ち上がりは遅くなるが、底釣りでなじむ途中に余計なサワリがでないため多用される。
- ② ツチノコ型：ボディの上下を絞ったタイプ。加工部分が少ないため、素材の持ち味を活かすことができる。「尽心作 匠」では、このツチノコ形状を裏バージョンとしている。具体例として、深ダナオールマイティタイプである「Type-F」の裏バージョンは、「Type-HF」で1本取りのツチノコ形状で、その他は仕様書通りとしている。現在、「Type-HD」、「Type-HF」の2タイプをラインナップしている。

なぜ、ムクトップを装着したウキにツチノコ型が多いのか、それはウキが戻ろうという動きに対して、鉛直上向きの水の圧力が少ないからである。

「ツチノコ型は戻る力が強い」というのは、「ツチノコ型は、ウキが戻ろうとする動きに対して、水の圧力が少なく戻りやすい」という方が適切であろう。

ウキの形状と水の圧力、ウキの形状と立ち上がり、この2つはウキの形状を決定する上で相関関係にある。このあたりの詳細に関しては、また改めて解説したい。

次回はもうひとつの底釣り、「両ウドンの底釣り」用ウキと自重に関して、解説していきたい。

以上